８月２３日（日）主日礼拝レジュメ
「すべては神の御手による」　伝道者の書２章２４節

伝道者は、「人には、食べたり飲んだりして、自分の労苦に満足を見出すことよりほかに、何も良いことがない」と言い、食べる、飲む、労苦するという、誰もが行っている生活の基本的なことの中に満足を見出すことを良いこととして勧めているように思える。

このことについては、さまざまな意見が出されている。
人生が束の間であると考えるなら、飲んだり食べたり、自分の労苦に満足を見出すという考えが変わってくるのではないか。そうすると、自分が好きなものを飲んだり食べたりできることに本当の喜びや満足を見出すことができるのではないかと主張する人もある。

また、この伝道者は人生に対する新しい視点として食べたり飲んだり、自分の労苦に満足を見出すことも楽しまれるべきものだと考えるようになったと言う人もある。しかし、伝道者が言っているのは、楽しむことが良いとか悪いということではなく、そこに本当の満足を見出すことがなく、空しさを感じることを問題にしているということ。

ここで重要なことは、「そのようにすることもまた、神の御手によることであると分かった」ということ。つまり、神の御手による、すなわち神の支配の中で、神が許されなければ、楽しんだり、飲んだり、自分の労苦に満足を見出したりということすらできないが、２４節で伝道者が言っているのは、限られた満足であって、伝道者が追い求めていたような心の底からの満足や喜びを言っているわけではないということ。

多くの人が神を信じないで生きているが、もし私たちが、食べることも飲むことも、自分の労苦に満足を見出すことも、すべて神の御手によることだと分かった、つまりそのように信じられるなら、私たちの人生観と申しましょうか、私たちの物の見方など、すべてが大きく変えられるのではないか。もし神を信じることにより、神様がなすべき務めを与え、健康を支え、そして収入を与えてくださり、飲んだり食べたりできることを感謝しますという思いでいるなら、人生観もずいぶん変わってくるだろう。また自分の労苦に満足を見出すことについても、神にすべてをゆだねるなら、神が私たちに満足を与えてくださる。それは、自分の務めを通して神に仕えている喜びと満足で、これは神を信じている者にのみ与えられる喜びと満足であると言える。

創世記１章を見るなら、「神はそれを良しと見られた」とあり、１章３１節には「神はご自分が造ったすべてのものを見られた。見よ、それは非常に良かった。」神はすべてのものを造られた時に、確かに喜びと満足があった。そして、もし私たちが、自分が当たり前と思っていたことに神の御手によると、神を見出すなら、神が持っておられた満足と喜びを経験することができる。それは、神が私たちの人生におけるすべての営みの満足と喜びの源泉だから。

「人には、食べたり飲んだりして、自分の労苦に満足を見出すこと」について神の御手によることが分かれば、それも良いことだと思える歩みができていくと思えるし、人生の中で、食べたり飲んだり、自分の労苦についても、これも神から来ていることと神の御手を意識することができれば、私たちの人生には何も良いことがないから、これも良いこと、あれも良いことと神に感謝できるように変えられていく。